

しかし、楕円形については検討の余地が残されよう。大西遺跡の場合、1例のみであるが、楕円形の陥し穴状遺構が溝状の陥し穴状遺構に切られている様子が観察されているものがある（陥し穴状遺構7と8）。どちらも遺物が出土しておらず、具体的な時期については不明である。

灰白色の火山灰が入っていない例としては、札幌市S239遺跡やS255遺跡で、埋土中から縄文時代中期土器片が出土している例がある（札幌市教委 1975、札幌市教委 1979）。

一方、底面に十和田aとみられる火山灰が入る例としては、胆沢町宮沢原下遺跡の例がある（（財）岩手県埋文センター 2005）。

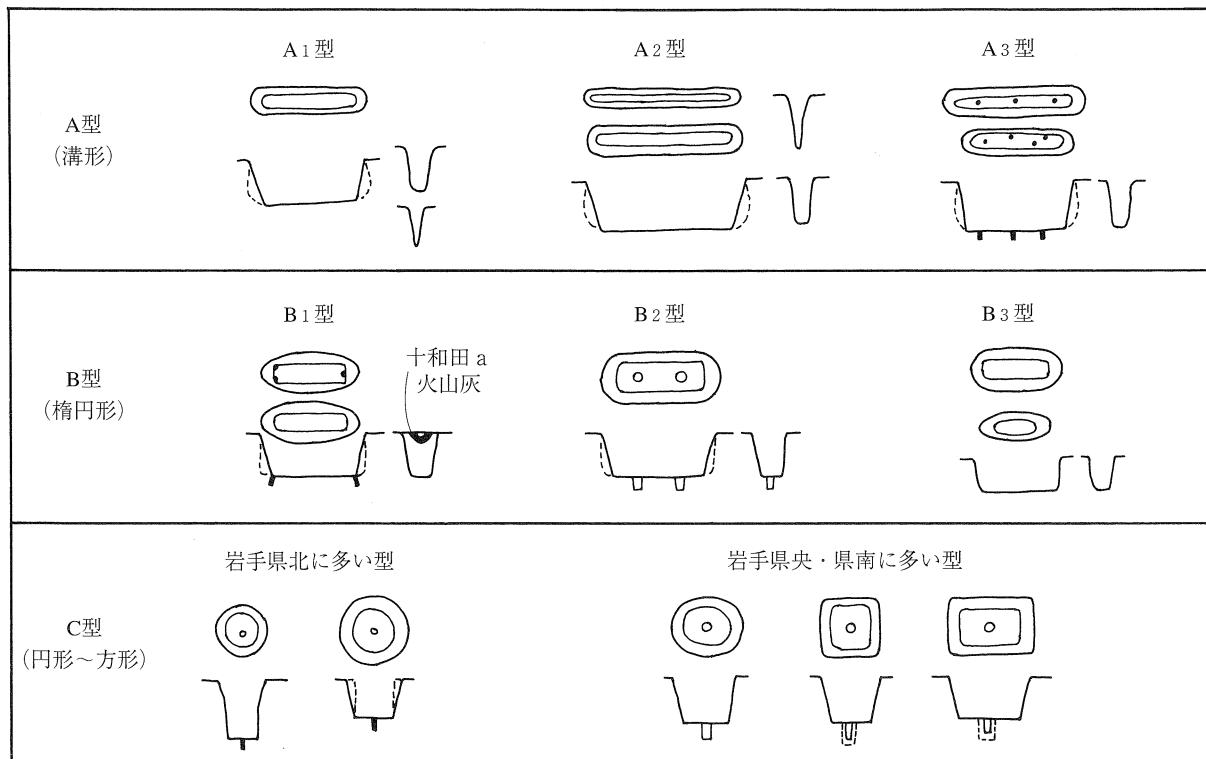
以上のことから、およその形態変遷は田村氏の述べているとおりであるが、楕円形の陥し穴状遺構については、十和田a火山灰の有無や構築方法によって時期が大きく変わる可能性があると思われる。

陥し穴状遺構の場合、田村氏も地域的相違や年代について相互の関係を今後より検討しなくてはならないと述べられているが、まさにその通りであり、陥し穴状遺構の年代を推定する場合には、形態ばかりではなく、埋土など複数の視点から検討すべきであろう。

（戸根）

（注3）溝状陥し穴については後期初頭以降にも残っていた可能性を留保している。

（注4）晩期中葉から平安時代まで楕円形が存在したというのは、杭状の穴の痕跡があるB₁型のみであり、灰白色火山灰が入っていない楕円形の陥し穴については縄文時代のものであるという捉え方にとどまっている。



第56図 陥し穴状遺構の形態分類模式図（田村 1987を一部改変）

（2）亀形土製品について

土坑2で1点出土している。平面形態はほぼ楕円形で、正中線が認められる。左右4対の足を模した切り込みがあり、胴部には両面に沈線が入っている。顔面は突起状に表現している。2ヶ所に穿孔

があるものの、中実のものである。

日下和寿の報告によると、亀形土製品は岩手県内では22遺跡で60個体分出土しており、縄文時代後期～晩期にかけて出土する傾向があることが指摘されている（日下 1998）。調査の濃密の影響は多分にあるが、石鳥谷町周辺では、稗貫川沿いに所在する小田遺跡（大迫町亀ヶ森）や、大西遺跡の約3km南東にある安堵屋敷遺跡（石鳥谷町八重畠字五大堂）をはじめとした6遺跡で13個体が出土している。一概に言うことはできないものの、岩手県内で出土している亀形土製品の約1/4を占めており、集中する傾向がある。

（戸根）